

# 海住山寺蔵『相生の松』解説ならびに翻刻

高橋 秀城

本稿では、真言宗智山派海住山寺（京都府木津川市加茂町）に所蔵される『相生の松』（卷子本、一卷）の全文翻刻を行う。海住山寺蔵『相生の松』は、美しい装丁の卷子本で、金泥に下絵が描かれ、紙背には金箔が散らされている。保存状態も良く絵画も残されている。未紹介の資料であり、広く学界に紹介する意義は大きい。

海住山寺蔵『相生の松』の書誌的事項を記せば以下の通り。

海住山寺蔵『相生の松』。絵巻、一軸。紺地金糸模様布表紙に、金茶色の見返（三・五糎×二一・五糎）。淡黄色の鳥の子紙を料紙に用いた美しい装訂の卷子本（軸は紫檀軸頭軸）。金泥にて下絵（草木）を描く。毎葉二十二行程度、毎行十八字内外。本文は漢字平仮名交じり文。江戸時代中期の製作と思われる。表紙の左肩に金地の貼題箋のみが貼られている。内題、奥書なし。紙背は白地に金箔が散らしてある。収められている木箱の蓋表に「住吉之絵巻物 一卷」、箱の蓋裏に「住吉の絵巻物／隆範蔵（印記）／海住山寺蔵付了」と墨書直書あり（印記は朱方印陽刻「隆範」（二・一糎×一・二糎）＊佐伯隆範（一八四九～一九〇五）。全二十二紙（本文十六紙、絵六紙）が継がれており、各紙の寸法（二紙目以下紙幅のみ）は、一紙（三三・五糎×四六・八糎）、二紙（四九・三）、三紙（絵Ⅰ、四九・五）、四紙（四九・一）、五紙（四九・〇）、六紙（二四・三）、七紙（絵Ⅱ、四九・三）、八紙（四九・〇）、九紙（四九・三）、十紙（四八・五）、十一紙（絵Ⅲ、四九・八）、十二紙（四九・〇）、十三紙（二七・八）、十四紙（絵Ⅳ、四八・八）、十五紙（四九・〇）、十六紙（三〇・三）、十七紙（絵Ⅴ、四九・七）、十八紙（四八・二）、十九紙（四八・七）、二十紙（絵Ⅵ、九三・一）、二十一紙（四九・〇）、二十二紙（二六・二）となっている。所々、裏打補修が施されている。

海住山寺蔵『相生の松』が収められている箱の蓋表には、「住吉之絵巻物 一卷」と墨書されているものの、卷子本には題箋を付すのみで外題はなく、本文の巻頭には

内題も記されていない。従来、この箱の表書きの記載から、鎌倉時代前期に成立したとされる擬古物語『住吉物語』を絵画化した『住吉物語絵巻』ではないかと目されていた。しかしこの度、幸いにも閲覧する機会を得て内容を確認したところ、お伽草子『相生の松』（絵巻）の一伝本であることが確認された。

お伽草子「相生の松」は、別名を「松ヶ枝姫物語」とも呼ばれ、祝儀物・仙境譚・縁起物に分類されている。その話の概要は以下のようなものである。

この世で特に素晴らしいのは松である。昔、播磨の国高砂の浦に松ヶ枝姫という姫君がいて、摂津の国住吉の里に松高彦という神がいた。ある時、松高彦は、風の響きに誘われて播磨の国に辿り着き、松ヶ枝姫に一夜の仮の宿を求めた。松ヶ枝姫は、ここが仙境であることを告げ、ここに留まり夫婦になつてほしいと願う。松高彦は二本の松を植えて住吉に帰り、その後も変わらずに松ヶ枝姫のもとに通い続けた。やがて夫婦は年齢を重ねて白髪となったが、松の下で音楽を奏でると、忽ちに若返ったという。ついに夫婦の神は飛仙となって天に昇り、二人の契りはそのまま松に残された。国はいよいよ栄え、民は目出度い例証として「相生の松」と名づけたのである。

これまで『相生の松』の伝本としては、①天理大学附属天理図書館蔵『松ヶ枝姫物語（仮題）』、②藤井隆蔵『松たか彦物語』、③赤木文庫蔵『相生の松』、④海の見える杜美術館蔵（旧・王舎城美術宝物館）『相生の松』、⑤板坂則子蔵『相生の松』の五本が知られるのみであった。今回ここに紹介する海住山寺本は、善本と思われる③と同様に錯簡もなく、本文も整っている。③には若干の脱文も見られることから、それを補完するものとしても期待される。

また海住山寺本には、美しい絵画（六枚）も描かれている。試みに海住山寺本と他の④⑤の絵画を比較したところ、海住山寺本の人物描写は他の伝本よりも、より異国

風の書きぶりとなつてゐることが確認された。これは『相生の松』の舞台である住吉と高砂が、日本における仙境であるとの場面設定によるものだが、顔の表情や服装、草木の様子など、全てにおいて唐風の雰囲気や漂わせてゐる。海住山寺本の絵画は、④よりも⑤に近い構図に見受けられ、海住山寺本と⑤の絵師が参考とした何らかの絵画の存在も想起されよう。ただし、例えば最終図(絵VI)の「舞樂の場面」についてみると、舞人の人数や服装が海住山寺本では他の伝本と異なつてゐる。今後、舞人の服装や編成などを検討することで、舞樂の曲名も明らかになるかもしれない。

『相生の松』の伝本は極めて少ない。お伽草子『相生の松』の成立と需要、享受の在り方などを探る上においても、海住山寺蔵本が見出されたことの意義は大きい。内容については別稿に譲り、本稿では海住山寺蔵『相生の松』の全文を翻刻する\*。

\* 本稿と関連するものとして以下のものを用意している。拙稿「海住山寺蔵『相生の松』(絵巻)について」(『智山学報』第六十二輯、平成二十五年三月発行予定)。

〈付記〉

貴重な蔵書の閲覧、掲載を御許可いただき、種々御教示を賜りました海住山寺御住職佐脇貞憲様に心より御礼申し上げます。

また本稿は、智山勸学会奨励研究助成(共同研究)の成果の一部である。

【凡例】

翻刻にあたっては次のような方針によつた。

- 一、底本は、海住山寺蔵『相生の松』である。
- 一、行移りは底本のままとした。
- 一、漢字は原則として通行の字体に改めた。
- 一、紙継ぎは「をもつて示し、「一紙」のように紙数を記した。また、絵画箇所は(絵I)のように示した。

【翻刻】

それむかしか今にいたるまでめてたきためしとする事はさま／＼おほきその

中にもかのひな鶴のすたちては千

とせをたもつことふきををしめし又いけのかめのかひあらはれてよろづ代の久しきかけをうつすとかやされともことにめてたきふゆのあらしのさむきよやはけしき霜にいろかへぬ松こそめてたかりけれかゝる事にこそちやうせい殿のにはのまへにはあねはの松をうつしうへふらうものどひらのうちには姫小松こそおひそめけれとをくもろこしをたつぬれは赤松子といふせん人は松のはをしようしていのちをたもつにはかりなくさてわかつてうのいにしへするかのみほのまつ原はところからなるれいちとして天人こゝにあまくたりなつともつきしとえいしけん君をいはふ千秋のつるや木すゑにかよふらんしかるに世の中のさうもくのしなはさま／＼にわかれてその名はかはれともおとこ女のみちありてちきりはつきぬ事そかしれんりのえたのへたてなくねはふうへ野のつほすみれたえぬなさはありといへとおおひの名をあらはしてめてたきことにつたへたるははりまのくにたかさこのうらにまつかえひめとてかほかたち世にたくひなき姫神おはしけり此神をまつかえと申ける事はすみ給ひけるにはのおもにひめ小松を引うへてときはのいろをあいし給へはかくは名つけ侍るなりかのひめ小松はとし月やう／＼ふるほとにえたさかへ葉しけりてうらのあらしに

きんするこゑさなからことのしらへをなし  
きははこゝろもすみわたり侍ける松かえ  
ひめこれにこゝろをなくさみ木のもとを  
立さり給はず又とし月のかさなれとも御  
かたちはいよゝわかやきておとろふるい  
ろはましさす

「2紙

(絵1)

「3紙

こゝに又津のくにすみよしの里すみよしの  
うらにまつたかひこのみことゝて御神おはし  
けりこの神をまつたかひこと申ける御事は  
松のみとりのいろかへぬこす糸はたかきえた  
くゝのしけりあひたるありさま霜夜にさむ  
き風のをと秋よりふゆにいたれともまつは  
かはらぬはいろにてかけもつきぬおち葉の  
かすかさなるとしになぞらへつゝふかくこれを  
めて給へは松たかひことぞ申けるそれよりむ  
かしをたつぬれはかたしけなくも天神よりは第  
七代いさなきのみこと曰うかのくにたちは  
なのをとあはきか原にゆき給ひきしに  
くたりなみをわけてうしほにたはふれ給ひ  
けるにうしほの中よりあらはれ出て神と  
なり給ふそのゝちすせんさいをへてすてに  
人代にをよひしんむ天わうよりは第十五代  
しんくうくはうこうと申込みとかうらいはく  
さいしなこの三かんをはたいらけて日ほんこく  
にしたかへんとおほしめしたちけるとときかの  
あはきか原のなみまよりあらはれ給ひし  
御神やかて御かたちをあらはしてしんくうく

はうまみえ給ひいくさの手たてはことくゝく

「4紙

この御神より出たりけりかくてしんくうくは  
うこうもろこしにおもむき給ふ御とききよ  
くたのふひとなりて思ひのまゝに三かん  
をせめたいらけ日ほんの地にかへらせ給ふ  
御とき津のくにゝいたりつきて御神こゝに  
すみよしとの給ひてあとをたれ給へはずな  
はちしつめたてまつりつゝふかくまもりの  
やしろをたて住よしの明神とは申すなり  
かくてとし月かさなりつゝれいけんならひ  
ましまねはくにたみうやまひたうとみてう  
らはまゆふしてかけてまうてくる事かきり  
なし八人のやおとめ五人のかつらおのこつね  
にしやどうにしこうしてしんりよをすゝし  
めたてまつるさつゝのすゝのこゑはうらふく  
風のをとつれてなみ木の松にひゝき  
をそへたうゝたるつゝみのらへはきし  
うつなみにたくへつゝいとゝ宮ぬそにきは  
ひけるしかるにかのすみよしのうらと申は  
さうかいまんゝとしてにしにむかひ四こく  
九こくのすゑまでもたゝめのまへにうちつゝ  
き手にとるはかりにおほえたりされはにや  
津もりのくになつこのうらのてうはうをよ  
みける歌にも

「5紙

あさゆふにみれはこそあれ住よしの  
うらよりをちのあはちしは山  
と詠しけるもこの御神の御こゝろをし  
つかにかんしたてまつるにもろこしより  
わかつてうをうかゝひとらんとする事世々  
のためしのおほきことをかねてよりしるし

めされつゝこの日のもとの四方のうみなみも  
しつかにくにたみもゆたかにすめるまもり  
の神とならせ給ふそありかたき

(絵Ⅱ)

さてかの松たかひこはすみよしのうらに  
出てまつの木すゑをななめ給ふ松花の色  
十かへりみとりのそらにうつろひてそこも  
しらすあこかれ給ふかうみつらよりふきこす  
かせのひゝきにことこのしらへそ聞えけるあや  
しくおほしめしみつからきしにおりたち一  
えうのふねにさほさしつゝこゑをしるへにたつ  
ね給ふしき津たか津をうちすきてなにはの  
みつのはまおもてこかれてゆけは名にしおふ  
はりまのくにゝきこえたる松のあらしも高砂  
やおのへの里にそつき給ふしはしやすらひ  
きゝ給へはかすかなりけることの音のしらへは  
こゝそとぎゝとゝめふねよりもおり立つゝかなた  
こなたをめぐり給ふにかしこなりけるところに  
家づくりつきゝしきにはのおもに姫  
松あまたおひたちつゝいく世へぬらんとおほ  
しくてものふりたる木すゑのいる雲間に  
いりてしけりつゝうらふく風をとつるれば  
えたにひゝきはにふれて玉のをことこのしらへ  
をなし第一第二のけんのふるかことく引か  
ことく第三第四のけんうつかことくあかるか  
ことく第四第五のけんのごゑは又千とせを  
いはふ君か代の久しかるへきためしとて万  
せいらくやそうすらんくにおさまりたみ

「 6 紙

「 7 紙

「 8 紙

やすく五こくみのりてをたやかなる太平

らくも聞ゆなりまつたかひこ立とまりつく

くゝときこしめしこゝろにふかくおもひしめて

かへらんことをわすれ給ひ日もやうくにくれ

はとりあやしきまてにくらかりければやかて

うちにいらせ給ふにあまた人もなしたゝめしつ

かふ女わらは一二人のみ侍りて世にやことな

き上らうともし火をとらせつゝかへにそむけ

るかけまてもおもひしりたるありさまなり

まつたかひこのみことはこのよしをみ給ひて

心そらにうかれ給ひおもひのやみちをた

とりつゝ女のわらはをまねきよせあるし

の名をたつね給ふにわらはこたへて申やう

こともをろかやきこしめしもをよはずや

松かえひめと申てつねにはにはの松にたはふ

れときはのいろをあいし給ふ木すゑにひゝく

きんのこゑに心をすまし給ふなりこゝはめて

たきせんきやうにて世のつねの人などは

きたりすむへきところならずとくゝかへり

給へといふ松たかひこはきこしめしこゝは

名にしおふはりまかたまつのあらしもたかさ

こやおのへのさとゝ聞なればそれかしこゝろ

にもところさへおもしろやことさら又わか心

にふかくしめて思ひ侍るは木すゑのこと

のしらへのこゑうらのあらしにふきをくり

て津のくにすみのえの里まで聞え侍れば

こゑをしるへにきたりてあり日もすてに

暮ければかへらんみちもさたかならすなみまを

わくる一えうの舟をはきしにつなきしかと

もふくる夜しほのうなはらにあまのたく火

「 9 紙

もほとゝをしたゝねかはくは一夜のあくる  
ほとやとかし給へとありけれ女のわらはう  
ちにいりてこのよしまつかえひめに申けり  
あるしきゝ給ひてすみよしときくからにこの  
ところきゝつたへてこゝろにかゝること侍り  
されとも身つからかわひてすむなるとまや  
のうち竹のあみ戸もすさまじやしきし  
のふへきものもなしあまのかるもをしとね  
として一夜をあかし給へかし

さらはこなたへいらせ給へとて

うちにいさなひ

たてまつる

(絵Ⅲ)

まつたかひこは大きによるこひ給ひつゝある  
しにかたり給ふやうそれかしはこれよりもお  
しかのつゝ津のくにや人さへいとゝすみ  
よしのなみ木の松たかひこと申ものにて  
侍りわれむかしよりこのかたはまへのまつに  
心をよせ吹こす風もなひきあふ小えたの  
みとりときはなるいろにたはふれ侍るなり  
しかるを住のえのうらはのをちよりふきを  
くる舟のさほにまかせてこのところまで  
きたりしにはのおもなるひめまつの色に  
なかめのつきせずして日もすてにくれ侍り  
君御なさけのふかくおはして一夜かりかねのやと  
かさせ給ふ事こそかへすゝもありかたけれと  
の給へはあるしはきこしめしされはとよ身つ  
からも心を松にたはふれてこのよし年月こそ

10紙

11紙

久しけれ君はしろしめさるましこのたかさこ  
のおへのさとゝ申は神代のいにしへより  
よのつねの人などはきたりすむへきと  
ころならすさもやことなきせんきやう也  
みつからかくれてこのところにすむとはたれ  
かしらまゆみやことなき人ゝにはみゆるも  
中ゝはつかしやけにこのうへにはなにをか  
はゝかり侍らん君このところにとゝまり  
てみつからもるともに松のときはの

ふかみとり千代もかはらぬ

ちきりをなして

住なれたまへ

かし

(絵Ⅳ)

むかしもろこしにりうしんけんてうといふ  
人ありけり山にいりてくすりをもとめ  
けるにたにゝくたりて水をむすひ侍り  
ければみつのうへにこまといふものゝうかひ  
てみえ侍り又そのあとよりうつくしきさ  
かつきのなかれきたりけりりうけんあや  
しみていかさまにもこの水上に人里あり  
とおほえたり行てみはやとてなかれにまかせ  
てみなかみやたにのいはまをつたひゆくこと  
二十里はかりとおほしくてやまふかく入ければ  
木す糸のりのこ糸までもきゝなれぬこゝ  
ちしてかたはらをみやりけるにもゝのはやしの  
しけりあひて今をさかりの花のいろに  
ほひは四方にみちゝたりりうけんしはら

12紙

13紙

14紙

くたちやすらひ思ひもよらぬみやまちに  
 かゝるところもありけるかや木たちさすかに  
 ものふりてあやしきとりのこゑくゝにさえ  
 つるまでもめつらかなりこはそも人けんかい  
 にはよもあらしいかさま日ころをとにきく  
 せんきやうなるへしと思ひあたりけるおり  
 ふしさもうつくしき女房二人たにのほとり  
 に立いて、水をむすひものをすゝくあり  
 さまなりけるかりうけんを見つけて大き  
 によろこひ君をまつ事久し今よりは  
 此ところにとゝまりて我とふうふになり  
 給ひなかきいのちをたまち給へとて家に  
 いさなひ行つゝちきりふかきかたらひたくひ  
 なくこそきこえけれかくてりうけんはさすか  
 ふる郷もゆかしくて山よりさとに立かへれ  
 はわつかに三年とおほえしかさとは七世  
 のまごありてりうけんたつねあひたりけ  
 り二たひ山にわけいりてもどのたにみつ  
 をもとむれとももゝのはやしはなかり

けり

(絵Ⅴ)

かゝるためしをきくからにりうけんはもろこし  
 のせんきやうなりおのへはわかつてうのせん  
 きやうそかし君たゝ人にましまさすみつから  
 うき世の人ならず松にこゝろをかけまくも  
 ふうらうふしのさとりをえてたのしみをき  
 はむるなり今よりのちはこのところにとゝまり  
 給ひいもせのちきりをむすひつゝたえぬ

15 紙

16 紙

17 紙

なさけをかけ給へとかたり給ふやうくよも  
 ふけかたの木すゑのあらしも心してふくや  
 ちとりのなくこゑのとをくきこえてしはしあれ  
 は又ちかくこそきこえけれこれやちとりのな  
 くこゑにしほのみちひをしるといふうたの心  
 もたくひなしかたらひよりてをしかものそ  
 ひねのゆめやあけほのゝよこ雲すてにた  
 なひきければまつたかひこはおいきいてゝさゝ  
 の一よのかりふしもちきりのすゑはいつまでも  
 かはらてとしはつもれたゝたとひくにをはへ  
 たつともかよひなれなは君とわかこゝろつかひ  
 はとをからし君はめまつをうへ給へわれはお松  
 をうへそへていもせの中のいく久しくちきり  
 はつきぬ世ゝかけてこれをしるしにさためんと  
 て二もとの松をうへ松たかひこはずみのえ  
 にたちかへりたまひけりそれよりはひ  
 たすらにあめ雪のふるときもあらしは  
 けしきおりからもなみちをわくるあま  
 をふねきりまをつたふ見えかくれ人めをし  
 のふ心ちして夜ことにかよひけりかのふうふ  
 の御神の手つからうへ給ひけるめまつお松  
 の二もとは年月にしたかひておなしほとなる  
 わかみとりえたさかへ葉しけりてこすゑは  
 雲にわけいりけりかくとし月の久しければ  
 ふうふともに御かたちの老しましゝゝて  
 かしらに雪をいたゝき給ふさらは木のもと  
 に立よりてよはひをかへすをんかくをなすへし  
 との給ひてにしきのしとねにしきのまく  
 おのへの風にふきかへさせねとりのふえの  
 こゑすみて名もたかさこのうらにひゝけは

18 紙

ふしとくま野とあつたを是三神せん山といふこのうちにこもり給ふもろくのせん人たちわれもくとあつまりてをんかくをそうし給へはかいていのうろくつともあまりのかんにたへかねていそやなきさにあつまりてちやうもんするこそありかたけれ

(絵VI)

けにもきとくはありあけの月の入さやにしのかたよりしうんそらにたなひき雲の中より吹おろすあらしは松にをとつてふうふの神の身にふるればたちまちすかたはわかやかにもとのかたちとなり給ふむかし住よしの明神うちのはしひめにかよひ給ふみやうしんきたり給ふ時はうちの川みつをとたかくあさ日山の夜あらしのはけしかりしそしるしなるされは明神の御歌に

夜さむきころもやうすきかたそきの  
行あひのまに霜やをくらん

とふゆの夜をわひ給ひてよみ給ふと聞えしは宇治にはあらておのへのよるのかよひちにふゆの夜はけしきあらしのをとにあかつきをけるかたそきのゆき合のまのしもをわひてかくはえいし給へる也つゐにとし月ふるまゝにふうふの神はひせんとなり天にあからせ給ひつゝふかきちきりはそのまゝに松にのこし給ひけり二もとたかひにたちのひていよくさかへ侍る

19 紙

20 紙

をくにたみこれをいはひつゝめてきたためしに引なそらへあひおひのまつとそ名つけゝる古今の序にしるしつゝたかさこすみのえの松もあひおひのやうにとかゝれしはなかくつたはる君が代のひさしかるへきためしにはかねてうへさせたまひけるあひおひの松のことゝかや

22 紙

【校異】海住山寺蔵本一赤木文庫本(赤)

【1 紙】千とせをたもつー千とせをたつる(赤)、いけのかめのーいけのみきはにぬる亀の(赤)、あらはれてーあらはれては(赤)、めてたきーめてたきは(赤)、いにしへーいにしへは(赤)、みほのまつ原はー三ほのまつ原(赤)、しかるにーしかる(赤)、【2 紙】かはれともーかくれとも(赤)、ありといへとーありといへ共(赤)、かくは名つけーかく名をつけ(赤)、わかやきてーわかやかに(赤)、ましさすーましまさす(赤)、【4 紙】と申ける御事は松のーとそ申けるされは(赤)、ふゆにーふゆそ(赤)、かけもつきぬーかけともつきぬ(赤)、天神より第七代ー天神には七代(赤)、申みかどー申すみかど(赤)、三かんをはー三かんを(赤)、しんくうくはうまみえー神功くはうこうにまみえ(赤)、【5 紙】きよくたのーきよくたの(赤)、の給ひてーの給て(赤)、しつめたてまつりーしつめまつり(赤)、申すなりー申なり(赤)、とし月かさなりーとしかさなり(赤)、ましまねはーましまさねは(赤)、まいてくるーまふてくる(赤)、かつらおのこーかくらおのこ(赤)、しこうしてーしこう申し(赤)、ひゝきをそへーひゝきそへ(赤)、たくへつゝたゝへつゝ(赤)、すゑまでもーすゑまでは(赤)、【6 紙】しつかにかんしてーしつかにあんして(赤)、世々のためしのおほきことをーたひくゝ世々にをよひし事を(赤)、【8 紙】おのへの里にそつき給ふーおのへの里こそつけ給ふ(赤)、おり立つゝーをり立つゝ(赤)、うつかことくーうつるかことく(赤)、第四第五ー第五(赤)、【9 紙】立とまりー立つとまりつゝ(赤)、すむへきーすへき(赤)、【10 紙】ところさへーところからさへ(赤)、わか心ー我(赤)、ありけれーありけれは(赤)、てこのよしまつかえひめに申けりあるしきゝ給ひてすみよしときくからにーナシ(赤)、きゝつたへてーきゝつたへ(赤)、【12 紙】おしかーをしか(赤)、なみ木のーうらのなみ木の(赤)、吹こす風もー吹こす風に(赤)、ふきをくるーふきくる(赤)、

ナシ―風にきこゆる琴の音にあくかれ出てこく(赤)、きたりしに―きたり侍りしに  
 (赤)、君御なさけの―君の御なさけの(赤)、あるしは―あるし(赤)、このよし年月―  
 この年月(赤)、【13紙】住なれたまへ―住給へ(赤)、【15紙】りうしんけんてう―り  
 うしんぬんでう(赤)、侍りければ―侍りければ(赤)、今をさかりの―今をかきりの(赤)、  
 りうけん―りうぬん(赤)、人けんか―人けんせかい(赤)、【16紙】りうけん―り  
 うぬん(赤)、【18紙】りうけん―たうけん(赤)、ふけかたの―ふけかたに(赤)、ふ  
 くやちどりの―ふくやかもめの(赤)、雲すてに―雲すくに(赤)、久しく―久し(赤)、  
 【19紙】かよひけり―かよひ給ひけり(赤)、にしきのまく―おなしくまく(赤)、を  
 んかく―おんかく(赤)、なきさに―なきに(赤)、【21紙】吹おろす―ふきいつる(赤)、  
 山の夜あらし―山のあらしの(赤)、はけしかりし―はけしかりし(赤)、夜さむき―  
 夜や寒き(赤)、いはひつゝ―いはひまつりて(赤)